
とある科学の雷光共鳴

だいふく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある科学の雷光共鳴

【Nコード】

N6674Y

【作者名】

だいふく

【あらすじ】

隣の部屋から騒音が聞こえてくる。

「うるせえな……」

鳴神響輝は呟くが、止みそうにない。

仕方無いので部屋を出るとそこには片脚を押さえて悶えている隣人、上条当麻と純白のシスターがいた。

これは上条当麻の物語を原作のストーリーに沿って描かれる別視点

オリキャラ投稿について(前書き)

オリキャラ投稿についてです

オリキャラ投稿について

オリキャラ投稿についてです。

四話目現在では、

鳴神の表の友達が二人（二人は投稿して頂きました）
魔術師が二人（二人は投稿して頂きました）

というところですよ。

枠がありませんが投稿してくだされば本編に出すかは検討します。

投稿は感想でもメッセージでも構いません。

一人何回でも問題ないですよ。

キャラクターの容姿は「このアニメのこいつに似てる」とかではなく文章で投稿してください。

またオリキャラが必要になったらこのページは更新します。

他にも、「この辺こうしたらいいんじゃないかね?」とか「いやいやここはこうだよ」「みたいなことがありますたら指摘をお願いします。」

1 - 1 《幻想殺しの少年の隣のお話》（前書き）

新作完成だあああああ！

1 - 1 《幻想殺しの少年の隣のお話》

七月二十日

隣の部屋から声が聞こえてくる。

どうやら隣人、上条当麻が朝から誰かと話しているようだ。やたらとアクションを交えてだが。

「うるせえな」

部屋の窓際に置いてある黄色のソファアの上に寝転んでいる青年が呟く。

青年の着ている黒い地にナナメに白いラインが入ったパーカーとどこにでもあるようなジーパンからうかがえる体格は世間一般で言えば痩せている方だ。少しつり目気味の眼は鷹のように鋭く、世間的に見てもイケメンと呼ばれる人種だろう。髪形は右目が隠れるくらいに長い少し癖のある質のいい黒髪をボサボサにしている。

青年はソファアに寝転んだまま大きく背伸びをして眼を閉じた。

総人口二三〇万人。東京西部の大部分を占める巨大な都市。人口の

八割が学生というところから『学園都市』と呼ばれている

学園都市に住む生徒達には、超能力を発現させるための特殊な授業が組まれており、その能力は、定期的な身体検査システムスキャンによって「無能力（レベル0）」から「超能力（レベル5）」までの六段階で評価されている。

青年
鳴神響輝なるかみ ひびきは玄関の外から聞こえてくる男女の声を覚ました。

会話は聞き取れないが男の方は隣人の上条のものだろう。女の方は聞いたことがない。

その声を聞きながら鳴神は少しポーツとする。

「……………コンビニでも行くか……」
鳴神はズボンのポケットに財布と携帯があるか確認して部屋を出た。

部屋の外に出ると、片脚を押さえて悶え苦しむ上条と純白の修道服を着た外国人の少女がいた。

（外国人なんて珍しいな……。しかも白の修道服か……）
鳴神は外国人をあまり見たことが無い人だ。

ちなみに学園都市には大きな教会はない。しかもこの第七学区までシスターが出てくるなんて事はないので、こんなしょぼくれた男子寮に来るとは思えない。

どちらにしろ鳴神と上条は隣人以上の関係ではないので厄介事には首を突っ込まないことにした。

そのまま二人の横を通り過ぎコンビニに向かう。

コンビニで昼に食べる鮭握り買い、家に帰る鳴神たが玄関のドアを開けた瞬間に眠気が襲ってきた為、先程まで寝ていたソファで寝てしまった。

今度は外から聞こえる爆音で目を覚ました。

部屋が異常に暑い　　いや、正確にはこの学生寮全域の気温が何かの影響により異常な数値を出しているのだ。

「くそ……」

呟くと鳴神は一瞬にして部屋から消えた。

彼の能力は『ライトニング雷光共鳴』

大能力（レベル4）で電撃使い（エレクトロマスター）に近い能力であるが少々異質な能力だ。

通常時の最大出力は6億ボルトだが雨天時の最大出力は学園都市第三位の最大出力10億ボルトを軽く超えるため計測不能となる。

他人の体内の電気信号をある程度乱すことができ、対象者を酷い立ち眩みにすることが可能であり、ある程度までなら磁力操作もすることができ万能な能力だ。

能力名の由来は、身体を電気に変換できるところからきており、自身を電気に変換することで電流と変わらない速度で移動が可能。その時通った場所は感電する。

この電気変換能力を静電気が多い場所で使用すると身体に大きな負担がかかるため電撃使いに弱い。

彼はこの能力を使い寮の隣の建物の屋上に一時避難した。

「それにしても…何で俺の寮から煙があがってんだ？」

彼が先程までいた寮からは煙があがっているのでどこかの部屋の住人が小火ホヤでも起こしたのだろうか。

しかし夏休み初日である今日は寮に居るのは鳴神くらいのもものだろう。

「つか、そんなところに居ないで出てこいよ」

唐突に彼が誰かに声を掛ける。

「やはり気付かれていましたか…」

壁の陰から出てきたのは女だった。

腰まで届く長い黒髪をポニーテールにまとめ、Tシャツに片足だけ大胆にカットしたジーンズという常識の範囲内で少しおかしな格好をしているが、それら全てを打ち消すような物が彼女の腰に下がっていた。

二メートルを超える日本刀。物好きな人は持っているだろうが、本来学園都市にそんなものがあることが異常だ。それをその女は持っている。

「お前、『中』の人間じゃねえな」
トントンと右の爪先で地面をノックする。

「ええ、『魔術師』ですから。」

「また変わったやつだな…。お前何者だ？」

『魔術師』

学園都市に存在する筈のない言葉。

それはオカルトの領域であり、存在する筈のない人間。

「私は『必要悪の教会』^{ネセサリウス}に所属する神裂火織と申します」

(ネセサリウス?)

鳴神は僅かに疑問を抱くが特には気にしない。

「お前、あの煙に関係してるな」彼は先程までいた学生寮をチラッと見る。

「あれはステイルの魔術ですね。私のものではありません」
神裂のポニーテールが風になびく。

「要するに仲間か。それよりお前」
不敵な笑みを浮かべる。

「強いな」

刹那、神裂を四方から六億ボルトの電撃が襲った。

「七閃」

鳴神が放った全ての電撃が神裂火織の斬撃によって打ち消された。

その斬撃はそのまま鳴神の頭上三センチ程のところを引き裂いた。
彼の髪の毛が宙を舞う。

「へえ」

その洗練された動きに思わず声を洩らしてしまう鳴神。

「これでも退きませんか…。七閃っ!」

まるで鎌鼬^{かまいたち}。七つの斬撃が屋上のコンクリートを削りとっていく。神裂は既に刀身を鞘に収めていた。しかしその動作があまりに速すぎて肉眼では刀を抜いたようには見えない。

まるで、巨大なレーザーが鳴神に襲いかかってくる。

しかし
当たらない。

「っ!？」

神裂が驚愕する。普通の人間ならそういう反応をするだろう。鳴神が消えたのだから。

しかし直後には神裂の後ろに立っている。

「なっ!」

神裂は気配に気付き、刀を抜かずに鞘ごと背後を切り払う。鞘がある状態であつても風を切る音が聞こえる程の勢い。

しかし居ない。

また消えた。

神裂から5メートル程の距離の場所に

パチツ、という音が聞こえ、鳴神が現れる。

「貴方は一体何者なんですか？」

斬撃を繰り出しながら神裂が質問してくる。

「俺は、ただの高校生だよ」

鳴神が質問に答えた瞬間、神裂を激しい目眩が襲う。鳴神が生体電

気を操作したためだ。

鳴神の額を神裂の放った斬撃が掠めた。

一筋の血が流れる。

「このまま戦えばどちらもただでは済まなさそうですね」
「
刀で身体を支えるようにして立つ神裂。」

「確かにな」

鳴神の額から流れた血が頬をつたっていく。

「ここで体力を消耗するのは不味いですね…。一旦退くことにしましょー…」

そう言って神裂は屋上から去って行った。

一人残された鳴神は地面に大の字になって寝転ぶ。

「『魔術師』か」

#1-1 《幻想殺しの少年の隣のお話》（後書き）

オリキャラが数人欲しいですはい。

- ・ 暗部組織のメンバー三人
- ・ 鳴神の友達二人
- ・ 魔術師二人

こんなところです。

物好きな方居れば投稿お願いします。

1 - 2 《魔術師は常識を知る》（前書き）

随時オリキャラ募集しております

1 - 2 〈魔術師は常識を知る〉

その後、鳴神響輝は自分の寮に戻ろうとしたのだが、先程戦った神裂火織という魔術師の仲間が起こした火事騒ぎのせいで物凄い数の野次馬が来ていたので帰ることが出来なかった。

「ったく」

鳴神は仕方無いのでいつも世話を焼いてくれる幼馴染みのところへ向かう。

とはいっても同じ高校に通っているのだから寮はすぐ近くだ。

ピンポン

鳴神は幼馴染みの部屋の玄関の前に立って、インターホンを鳴らす。

「はいはい」

出てきたのは幼馴染みである阿澄泉^{あすみずみ}。鳴神は見たことがないが常盤台中学の『超電磁砲^{レールガン}』が髪を黒く染めたみたいなき感じの少女で、性格も明るく活発的だ。

そんな阿澄に鳴神は告げる。

「三日程泊めてくれ」

「……………」
「……………」

二人の間に沈黙。

勿論、皆様が想像したようなことは起きず四日が過ぎていた。
男女が二人きりで同じ部屋に寝泊まりしているのだが…。

現在、鳴神は夜の路上に一人で突っ立っているが、別に追い出された訳ではない。

『銭湯行かない？』
実は数十分前に阿澄から言われたこの一言が原因だった。

鳴神からすれば特に断る理由もないので行くことにしたのだが、超方向オンチである阿澄とはぐれてしまったのだ。

「……………」
もう諦めるしかない。

次にすべき事を鳴神が考えていると、純白のシスターが視界に入ってきた。

あの日、上条当麻の部屋の前にいたシスターだ。

鳴神が彼女を見かけたこと自体は常識の範囲内だった。

漆黒の修道服を身に纏った『魔術師（非常識）』が現れなければ。

突然、シスターの前に現れた白人の『魔術師』は二メートル近い身長だが、まだ幼い顔つきをしている。恐らく、そこで怯えているシスターと同じくらいの年齢だろう。

肩まである赤髪に、両手の十本の指には銀の指輪がならび、耳には幾つものピアス。口の端にある煙草の先からは煙がでており、右目の下にはバーコードのような刺青タトゥーが刻み込まれている。辺りの空気はまるで神裂と対峙した時のようだ。

「おかしいな、人払い（Opilia）の刻印ルーンは刻んでいるんだけど、もしかして発動前からここにいた？」
魔術師は笑みを浮かべながら呟く。

「知らねえ、つか常識を考えろよ……」
鳴神はうんざりしたように言葉を返す。

「僕達、魔術師は常識的な存在じゃ無いんだよ」
魔術師の顔からはまだ笑みが消えない。

「んで、非常識なお前の目的は？」

魔術師は懐からカードのようなものを出しながら告げる。
「ソレだよソレ」
魔術師が顎で指したものはシスター。鳴神も彼女を見る。

シスターが始めて口を開いた。

「あいつは私の中にある十万三千冊の魔道書が狙いなんだよ……」

鳴神は疑問を抱く。

「十万三千冊？」

その疑問には魔術師が答えた。

「その『禁書目録』は完全記憶能力を持っていてね。十万三千もの魔道書の原典が頭の中に入っているんだよ」

「へえ。ま、取り敢えず邪魔だし眠って貰うか」

そう言っつて鳴神はシスターに軽い電気を浴びせ、気絶させる。鳴神に身体を支えられ、ゆっくりと地面に寝かされる。

「んで、お前の名前は？」

「ステイル」マグヌス と名乗りたいところだけど、ここは Fortis931と言っつておこうかな」

神裂火織の話の中にも出てきた名前。

ステイル」マグヌスは口の端を歪め、煙草を揺らす。

「魔法名だよ、聞き慣れないだろう？ 僕達魔術師って生き物は、魔術を使う時には真名を名乗っつてはいけないらしくてね」
ステイル」マグヌスは説明をしながら鳴神に近付いてくる。
両者の距離が五メートルを切った。

「Fortis 日本語では強者と言っつたところだ。ま、語源はどうだっつていい。この名を名乗っつた事に意味があっつてね、僕達の間では、魔法名というよりは、むしろ」

「 殺し名っつてどこかな？」

魔術師は口の煙草を足下に投げ捨てた。

火のついた煙草はステイルの足に踏まれて消えてしまう。

「炎よ（Kenaz）」
ステイルが言葉を口にした瞬間、彼が手に持っていたカードのよう
なものが燃え上がった。

炎はそこを起点にして、ステイルの手から真っ直ぐに伸びる。

「巨人に（Purisaz）苦痛の（Naupiz）贈り物を（Gebo）」

伸びた炎は剣の形となり、鳴神に振り下ろされた。

炎剣は触れた瞬間にカタチが失われ、アスファルトを粉々にする。
超高温の黒煙と爆音が辺りを支配していく。

魔術師は笑みを消さずに背後に言葉を投げかける。

「今の、どうやって避けたんだい？」

「教える必要があるか？」

鳴神はステイルの質問には答えずに、ジーンズのポケットに右手を
突っ込む。

ステイルが新たな炎剣を生み出し振り向く。

直後、彼の視界から鳴神が消えた。

「チィ！」

ステイルは舌打ちをして辺りを見回す。しかし周りには誰一人居な
い。

「バチィ！」

そんなことをしているうちに彼の身体に強い衝撃が走る。

「ぐあつ！」

ステイルの身体が高圧電流を流し込まれた時のように感電する。

片膝をアスファルトの地面につくステイルの三メートル程前に鳴神が現れる。

「さっきの答えだ。俺は身体を電気に変換することが出来るんだよ」

「それは素敵な能力だね……」

ステイルは、高圧電流にボロボロにされた身体で立ち上がり、鳴神から一歩遠ざかる。

「世界を構築する五大元素の一つ、偉大なる始まりの炎よ」
ステイルが先程とは異なる詠唱を始めた。

彼の顔からはいつの間にか笑みが消え、無表情になっている。
まるで淡々と仕事をこなす殺し屋のように。

「それは生命を育む恵みの光にして、邪悪を罰する裁きの光なり。
それは穏やかな幸福を満たすと同時、冷たき闇を滅する凍える不幸なり。

その名は炎、その役は剣。

顕現せよ、我が身を喰らいて力と為せ

ッ！」

ステイルの修道服のボタンが内側からの力により弾け飛んだ。
そこから出てきたのは巨大な炎の塊。

ただの炎の塊ではなく、燃え盛る炎の中に、重油のような黒くドロドロしたものが『芯』になっている。それは人間のカタチをしている。

ステイルがその名を告げる。

『魔女狩りの王』インケンティウス。

その意味は『必ず殺す』。

炎の巨神は鳴神に少し近づいてくる。

まるで、全身が燃え盛り悲鳴をあげ苦しむ人間が、にじり寄って来ているような。

「チッ！」

舌打ちをして、右手を『魔女狩りの王』に向ける鳴神。

その指先から六億ボルトの電撃が放たれ、炎の巨神に直撃する。

バチィ！

その電撃の衝撃で『魔女狩りの王』は飛沫となり辺りに散らばった。

しかし、その飛沫の隙間から見えたステイルは最後の切り札を潰された筈なのに笑っている。

ビュルン！

四方八方から粘性の液体が鳴神の目の前の一ヶ所に集まる。

「ッ！」

驚いた鳴神は一步後ろへ下がった。

一ヶ所に集まった重油のような黒い液体は再び人間のカタチを作り上げる。

あのまま同じ場所に居ればあの中に取り込まれていただろう。

(再生能力か…)

ソレはカタチを変え、まるで両手に剣を持っているようなカタチになった。

いや、剣というよりはイエス・キリストが磔にされたような、二メートルを軽く越える巨大な十字架だ。

ソレは両手の十字架を振り上げ、鳴神に襲いかかる。

しかし当たらない。

炎の十字架はアスファルトを焼いただけだ。3000の炎により地面が溶ける。

鳴神は『魔女狩りの王』から十メートル程の距離のところに現れた。そして呟く。

「常識を教えてやるよ、魔術師」

1 - 2 《魔術師は常識を知る》（後書き）

どうだったでしょうか？

僕にもだんだん文章力がついてきて、皆さんが楽しめる作品を書けたらな、と思っております。

感想、アイデア、合作者、オリキャラ募集しております

1 - 3 へ戦いが終われば休息を (前書き)

テスト前だが更新

1 - 3 へ戦いが終われば休息を

「常識を教えてやるよ、魔術師」

鳴神響輝はそう呟いた。

彼のいる位置から十メートルほど前には燃え盛る炎の巨神『魔女狩りの王』イノケンティウス。

その後ろには魔術師、ステイル＝マグヌスがいる。

ステイルの口が動いた。

「殺れ『魔女狩りの王』」

その言葉に呼応するかのように、こちらへ跳んでくる『魔女狩りの王』。その速度はまるで弾丸のようだ。

しかし鳴神がまた消えた。

そしてステイルの真横に現れる。

「チィ！小賢しい真似をするな！」

ステイルが炎剣を生み出し鳴神を横に斬り払った。

しかし炎剣は何にも当たらず空振りする。

鳴神は、今度はステイルの目の前に現れた。

ステイルは有無を言わず炎剣を縦に降り下ろす。

しかし、炎剣はアスファルトに叩き付けられ爆発を起こす。アスファルトの破片が辺りに飛び散るだけだ。

「クソッ！『魔女狩りの王』！！」

ステイルは炎の巨神を五メートル程先にいる鳴神に目掛けて突進させる。

『魔女狩りの王』と鳴神の距離はすぐに縮まった。

十字架を両手に持つ炎の怪物はソレを鳴神に向かって降り下ろす

筈だった。

鳴神の目の前にいる筈の『魔女狩りの王』は黒い粘性の液体になって辺りに散らばっていた。ソレがピクピクと蟲のように蠢いているのが吐き気を催す。

しかしもとのカタチには戻らない。

「『魔女狩りの王』！？なぜ再生しない！？」

その現象に狼狽えるステイル。

鳴神が口を開いた。

「お前の魔術に使ってる、この辺りにあった紙、全部燃やしたんだよ」

ステイルはその顔に驚愕の表情を浮かべる。

「な…何故『魔女狩りの王』の正体がルーンだとわかった！？それより今の状況でどうやって燃やしたんだ！？」

自分の常識では理解出来ないことを鳴神に聞いてくる。

「電磁波でサーチしたら大量の紙切れがあった。魔術に使っているとしか思えない。燃やしたのは常識的に考えれば電撃だろう」

紙を燃やすのに電撃を使用するのは別に常識ではないが、鳴神は説明をしていく。

「なっ、まさかそんなことが……。くそっ、炎よ（Kenaz）」
懐からカードを取り出し詠唱を始めるステイル。しかし詠唱は途中で途切れる。

バチィ！！

ステイルの頭上から六億ボルトの電撃が降ってきたからだ。

「ぐあああああああ　　！！！」

彼の身体には超高压電流が走り、意識を狩り取っていく。

「くそ　　」

炎の魔術師は最後に鳴神をギロリ、と睨み付け、その場に倒れ込んだ。

鳴神はそれを見て、ステイルの意識が無くなったと判断した。

「お前じゃ俺には勝てねえよ。常識だ」

彼はそう告げた後、ステイルに背を向け歩き始めた

後日、鳴神は帰宅していた。

簡単に説明すると、鳴神はあのあと阿澄を見付け銭湯には行かず彼女の部屋に連れて帰り、スタイルと戦っている間に完璧に修理されていた自分の寮に帰ったのだった。

そういえば隣の部屋の上条はここ三日は帰ってきていないそうだ。多分、あの『禁書目録』と呼ばれていた純白シスターに関係しているのだろう。

そんなことを考えながら自宅のソファで横になっている鳴神である。

ケータイの着メロが鳴る。

阿澄からの電話のようだった。

鳴神は心底面倒臭そうにソファから身体を起こし、ケータイに手を伸ばした。

「なんだ、泉……」

『あ、いや……ね、昨日は結局、銭湯に行けなかったから』

「お前が迷子になったからなんだが……」

的確に原因のみを説明してあげる鳴神。

『うっ……。それは置いといてよ！プールよプール！プールに行こうって言ってるのよ！』

鳴神はうんざりしたように「また迷子になるだろ」

『ならないわよ！……』

阿澄が大声を張り上げたせいで耳が痛い…。

「行ったらいいんだろ…。んでいつ誰と行くんだ？」

『私に決まってるでしょうがあああああ！！！』

流石に通話を切った。

ピロリン

デフォのままにしてあるメール受信音が鳴る。

案の定、阿澄からのメールだった

集合場所なんかをまとめたもののようなのだ。

集合場所は第六学区の『竜宮ランド』という最近出来た、プールとか遊園地とかの複合施設らしい。

メンバーは勿論二人。何を考えているんだか。時間は明日の午後1時とのことだ。

「仕方ねえ…。」

鳴神はそう呟いたあと、眠りについた

七月二六日である。

鳴神は『竜宮ランド』の前に来ていた。

現在、一時二十分。

鳴神は集合時間の十分前には来ていたのでかれこれ三十分は待たされてる。

『竜宮ランド』は最近出来たということもあつてか、かなりの人が集まっている。

その人ごみの中に阿澄がいるのを見付けてしまった。

向こうも気付いたらしく手を振って走ってくる。

そんなことをする阿澄は誰かの足に躓いて、鳴神の目の前で転けた。当たり前だが、鳴神に関してラブコメのようなハプニングが起こるはずもなく、彼は自分に向かって転倒してきた阿澄を避ける。

「ふにゃあ！」

なぜか猫みたいな声を出しながら地面に向かって盛大にダイブした阿澄。

「……………」

鳴神はそれを凄く冷たい目で見る。

起き上がった阿澄が言った。

「じゃ、行こっか」

周りにいる人はみんな水着姿。
勿論、鳴神と阿澄も水着である。
鳴神は青色の地にイルカのイラストが描かれている、どこにでもあ
るような水着だ。

阿澄は黄緑色の横縞ビキニで所々にフリルがあしらってある結構派
手な水着だ。

意外に胸のある阿澄だが、ビキニを装着したことによって谷間がモ
ノスゴイことになっていたりする。

しかし鳴神はそんなこと気にしない。

「じゃ、俺は寝とくから」

そう言つて、ベンチへ向かう。

「えええええ！？来てすぐ寝るの！？少しぐらい遊ぼうよ！」
急いで引き止める阿澄。

「いや、俺が水に入るとみんな感電するんだが……」
鳴神の能力は『雷光共鳴』である。彼は無意識のうちに微弱な電流
を身体から放っているため、水に入ったりすると周りの人はみんな
感電してしまうのだ。

「あつ……………」

そんな事実気付いて絶句する幼馴染み。

「……………」

「……………」

二人の間に沈黙の時間が訪れる。

ちなみに夏の間は遊園地のエリアは閉鎖されている。
つまり、二人はやることがない訳だ。

「どうしよっか……………」

「知らん、寝る」

そう言ってベンチへ向かう。

その行動に阿澄は

「もう止めません……………」
諦めた。

その言葉の直後、女の子の悲鳴が聞こえた。
辺りの人の視線が一ヶ所に集まる。

その中心では三人組の男が中学生くらい少女を人質にとっている。
その中の一人は拳銃を持っているようだ。

「オイ！こいつを助けたけりゃ売上金全部持ってこい！」
「どうやらこの『竜宮ランド』の売上金を目的とした強盗のようだ。」

「ちよ、響輝！どうしよう！」

焦る阿澄だが、鳴神としても困ったものである。

「まったく、常識をわかってねえなあ……」

鳴神が動いた。

犯人の方に向かって走って行く。

すぐに彼は身体を電気に変換して三人組に襲いかかる。

「ぐあつ！」「うがつ！」

うち二人は感電したようでその場に倒れる。

だが拳銃を持ったあと一人は倒れない。どうやら何かの能力を使ったようだ。

「電気が…、効かねえなあ！」

「何の能力だ？」

身体を元に戻した鳴神が聞く。

「俺の能力は『蓄電放出』バッテリーデイスチャージ、電気を蓄えて放出する強能力（レベル3）だぜえ」

強能力とはいえ、鳴神にとっては天敵といえる能力だろう。

人質にとられていた少女は二人が倒れたことで解放されているが、恐怖で身体を震わせている。

「常識を教えてやる、犯罪者」

直後、『蓄電放出』の周りに砂鉄が舞い上がった。

「なっ、お前電撃使いじゃないのか!？」

「常盤台の『超電磁砲』は磁力も操作出来るんだぜ？」

大量の砂鉄が『蓄電放出』を襲う。

「お前は一体」

『蓄電放出』は黒い竜巻に呑み込まれながら最後に聞く。

髪を掻き上げながら鳴神は呟く。

「ただの高校生だ……」

その言葉を合図に黒い竜巻は段々小さくなり最後には消えてしまった。

「あの……」

先程まで人質にとられていた少女が鳴神に声をかけてきた。

「気にすんな」

彼はそれを適当にあしらい阿澄に声をかける。

「疲れたし、帰るぞ」

そのまま更衣室へ向かっていく鳴神。

「ちょっと待ってよ」

それを追いかける阿澄。

「……………」

少女は二人の後ろ姿をずっと見つめていた

1 - 3 へ戦いが終われば休息を (後書き)

今回は若干の日常パートでした。

いかがでしたでしょうか？

今回は予告編みたいなので、その次から三沢塾編です。

勿論、原作は死守します。

ちなみに暗部メンバーの募集は次回までです。

他はまだまだですよ！

1 - 4 へこの道は次へと続く (前書き)

シリアスシーンって苦手です

1 - 4 《この道は次へと続く》

七月二七日

現在、午後十一時五十分。

そんな時間帯に鳴神はインターホンの音で目が覚めた。

(常識を考えろよ…)

そんなことを考えながらソファから身体を起こして玄関へ向かう。

「非常識だな…」

そついいながら開けたドアの先に

真っ黒のスーツに身を包んだ男が立っていた。

「貴方が『雷光共鳴』で間違いないですか？」

見知らぬ男は鳴神に丁寧な口調で話し掛けてくる。

「ああ、そうだが…。何者だ？」

「学園都市統括理事長、アレイスター・クロウリーの使いの者です」

鳴神は多少は驚いたようだが、表情を崩すことはなかった。

「んで、学園都市トップの犬が何の用だ？」

男は意外そうな顔をして

「自覚していらっしやらないんですか？」

「ああ」

意味がわからない鳴神は取り敢えずそう答える。

男は

「まあいいでしょう、本題に入ります。統括理事長が貴方と会いたがつていらつしやるのですが、貴方には無理矢理にでも着いてきて貰わなければなりません」

鳴神の口元に微かに笑みが浮かぶ。

「無理矢理じゃなくても行つてやるよ、理事長のところには」

「有難うございます。こちらは無駄な手順を踏まずに済みました」

軽くお辞儀をする男。

「それでは、統括理事長のいる第七学区へ送らせていただきます」

そう言つて男は寮の前に停めてあつた黒いワンボックスカーに鳴神を乗せる。

男の合図でワンボックスカーが緩やかに走り始めた

第七学区の窓のなくドアもなく階段もない異様なビルの中

そこに鳴神はいた。

その真正面には培養液に満たされた生命維持装置らしき機械の中に『人間』が浮かんでいる。

『人間』以外に表現しようのない生物。

銀色の髪を持つ『人間』は男にも女にも見え、大人にも子供にも見えて、聖人にも囚人にも見える。

学園都市統括理事長、アレイスター・クロウリー。

「理事長が俺に何の用だ？」

鳴神は得体の知れない『人間』アレイスターに向かって話し掛ける。傍目から見れば謎の機械と話している人ととられてもおかしくはない。

「大した事ではない。君が私の『プラン』に誤差を与える可能性があるるので監視する」

アレイスターは培養液の中で返事を返す。

「監視だと？」

アレイスターはその方法を告げる。

「暗部だ」

「っ！どういことだ…？」

流石に普段はクールな鳴神も少し動揺した。

「君は私の『プラン』に影響を及ぼす。つまり、それを逆手に取って『プラン』の進行を補助するために、この学園都市の暗部組織に入って貰うだけだ」

『プラン』が何なのかは鳴神にはわからないが、とてつもなくヤバイものということだけは分かった。

しかし鳴神は返事を返す。

至ってクールに。

「なってやるよ暗部に。」

ただし

彼はアレイスターを指差し

「常識を教えてやるよ、アレイスター」
「クロウリー」
いつもの台詞で、宣言した。

1 - 4 《この道は次へと続く》（後書き）

どうでしたでしょうか？

遂に響輝と暗部が交差します！

次回から三沢塾編ですが、ちゃんと戦いますよ！

これでオリキャラ、暗部メンバーの募集は終了です。

#2・1《この街の闇は明るい闇》(前書き)

やっと出来た

2 - 1 《この街の闇は明るい闇》

七月二八日

午前0時四十分

先程、光の柱が空に向かって放たれた学園都市。
その街の誰もいない裏路地を鳴神響輝は歩いている。
アレイスターのいた窓のないビルからの帰りだ。

日付が変わってすぐなだけあって街灯すらないこの裏路地辺りは真
っ暗だ。

そんな道を歩く鳴神の前に誰かが現れた。

現れたのは鳴神の知り合い。

「アレイスターくんに会った？響輝くん」
声を掛けてきたのは永松大王。ながまつおおきみ

切れ長な琥珀色の瞳で、顔立ちはやや童顔。前髪が短く、もみあげ
の長い特徴的な黒髪をしている。

鳴神の友人であるが、同時に『情報屋』をしている。鳴神とは中学
校からの付き合いで、仲も良い方だ。

「流石『情報屋』だな…」

鳴神は少し驚いたような顔をする。

すると永松は笑みを見せた。

「ボクが興味を持っているだけだよ。『面白いこと』にね」

鳴神は肩をすくませて、

「非常識な友達を持つと大変だな」

「確かに」

二人は微かな笑みを交わし、真逆の方向へ歩いて行く

鳴神が居なくなつたあと、琥珀色の眼を妖しく光らせて永松大王は
呟く。

「やっぱり面白いよ、学園都市は…」

八月一日

現在、鳴神は事前に電話で指定されていた、とある高級マンション
の一室に来ている。

どこにでもあるような、最低限の家具のみが置かれている小綺麗な

部屋だ。

そこには異様な三人の先客がいた。

ソファーに腰掛けている一人は般若の面を着けた不思議な男。

床に置いてある座布団に正座で座り込み、テレビでニュースを観ている一人は眼鏡を掛けた銀髪の女。

椅子に腰を下ろし紅茶を飲んでいる一人は真っ赤な長髪の女。

彼らは暗部組織『リバーズ』

アレクスター・クロウリーのプランを補助するただけに集められた集団。

鳴神はそのメンバーとなり、今日初めて彼らと顔を合わせたのだ。

「お前がアレクスターの言っていた新入りか？」

般若の面を着けた男が鳴神に声を掛けてきた。

「ああ」

鳴神は最低限の返事を返す。

「俺は岩見祥吾だ。知らないことはないだろう？」

鳴神は思い出したように呟く。

「六年前の連続殺人犯……」

岩見祥吾、という名前を聞いて鳴神が辿り着いたのはその言葉。

「その通りだ。今となつては何人殺したか覚えてないがな」
少し笑いを交えながら話す岩見は鳴神のイメージとは全く違った人物のようだ。

しかし眼には殺意が宿っているように感じられる。

岩見との話が終わると、いつの間にか鳴神の横にいた眼鏡を掛けた銀髪の女が話し掛けてきた。

「初めまして。星宮天音と申します」

星宮天音

そう名乗った女は少し悪い顔色をしている。貧

血か何かだろう。

彼女は華奢な体つきであるが服の上からでもかなり胸が大きいとわかる。

「鳴神響輝だ、宜しく」

一応、鳴神も挨拶を返す。

「能力の説明をしておきますね。私の能力は『天候操作』ウェザーコントロールといつて、天候を自在に操れる能力です。多分、貴方とは相性が良いでしょうね」

星宮は表情を全く崩さず説明を終えた。

確かに鳴神の能力である『雷光共鳴』は天候に大きく左右される能力だ。雨天時には常盤台の『超電磁砲』をも超える出力の電撃を放つ事が出来る。

天候を操れるとなれば軽く第三位に勝つことが出来るだろう。

「ああ、そつだな」

「私からは以上です」

星宮との会話も一通り終えた鳴神に、次は紅茶を飲んでいた赤髪の女が声を掛けてきた。

「ねえ、鳴神君ってかなり格好良いよね！モテるんじゃない？」
鳴神の前で初めて口にした言葉がこれだった。

天真爛漫というか思ったことがそのまま口に出てると言った方が適切かもしれない。

（非常識だなこいつ…）
鳴神も、ついそう思ってしまう。

「ねえねえ、どうなのどうなの？」
椅子から身を乗り出して聞いてくる女。

「名前は？」
取り敢えず名前だけでも聞いておこうと考えた鳴神は名前を訊ねる。

「へ？」
返事がこれだ。

鳴神の額に血管が浮かび上がった気がする。きっと気のせいだ。

鳴神はもう一度言った。

「お前の名前だ…」

「ああ、あたしの名前？あたしは夏野なつの夕日ゆうひ！ヨロシクね！」

鳴神が嫌いなのはこういつたテンションだ。

「鳴神だ、宜しく」

一応自己紹介をしておく鳴神。

「ちなみにあたしの能力は『精神操作』サイココントロールっていつて、目があった人を操れるの！」

簡単に言ってしまうえば洗脳能力だろうか。

「知ってると思うが、『雷光共鳴』だ」

「格好良いー！なにそののうり 痛ったい！」

誰かが台詞を途中まで言いかけた夏野の頭を小突いた。いつの間にか般若の面を外していた岩見だ。

左目の辺りに火傷の痕があるが、顔はかなり整っておりイケメンと称しても問題ないレベルだ。

「こいつの言うことは基本流せよ？」

暗部としての先輩だからなのか、夏野の扱い方を鳴神に教える岩見。

「俺を殺したいのか？」

先程感じられた殺意はいまだに消えていない。

「まあな。だけど女の子がいる前じゃ殺さないし、殺すと後が面倒だろ？」

岩見は笑って答える。

殺人犯の言うことは常人には理解できないだろう。

「確かに」

しかし鳴神は理解する。常人ではないために。

そこに星宮が声を掛けてきた。

「岩見さん。『リバース』の説明をしても良いですか？」

「ん、勿論」

星宮の方に顔を向けて岩見が頷く。

「有難う御座います。では鳴神さん、『リバース』の説明をしますね」

改まった口調で話始める星宮。鳴神はこういった人間は嫌いではない。

「頼む」

鳴神が最低限の言葉で返事をする。

「『リバース』とは学園都市統括理事長アレイスター・クロウリーの『プラン』の補助や軌道修正等を行う組織です」

また『プラン』

『プラン』とは一体何なのか、未だに鳴神には分からない。

星宮は説明を続ける。

「メンバーは私、星宮天音、岩見さん、夏野さん、そして鳴神さんの四人です」

「ああ」

先程の自己紹介でそれはわかっている。

「ちなみに『リバーズ』のメンバーは基本的に単独行動だ」
これは岩見の言葉。

「お話はそれぐらいじゃないかな？」

今度は夏野が言った台詞だ。

「そうですね、他にはありません」

星宮が締めくくろうとしたそのとき、とつぜん鳴神が手を小さく上げた。

「俺からもお前らに言っとくことが」

夏野と岩見がキョトンとした顔をする。

「どつぞ、鳴神さん」

鳴神は面倒臭そうに右手で後頭部を掻く。

この状況で彼が言うことは一つしかないだろう。常識を尊重する彼なら。

「お前らに」

鳴神は小さく呼吸を挟む。

「常識を教えてやるよ、『リバーズ』」

この日、鳴神響輝は暗部組織『リバーズ』に宣戦布告をした

#2・1〈この街の闇は明るい闇〉（後書き）

オリキャラ顔出し回です。

性格指定のなかったキャラは適当に性格を作りました。

いかがだったでしょうか？

次回からようやく三沢塾編突入！

だいふく

#2-2 《平穩はなかなか訪れない》（前書き）

短いですが更新です。

お待たせしてすみませんでした！

#2-2〈平穩はなかなか訪れない〉

八月八日である。

鳴神響輝は三沢塾という進学予備校の建物の前にいた。

三沢塾とは全国シェア一位を誇る進学予備校である。

予備校とはその名の通り大学に入るために勉強をするための学校だが、学園都市での『進学予備校』の定義はそれにさらにもうひと捻り加えたもので、本当は大学に受かるだけの実力があるのにわざと浪人して更に上のレベルの大学に挑戦する人のための学校だったりする。

なぜ鳴神がこんなところにいるか、その理由を知るためには二時間ほど前に遡る。

『ちよつとちよつと、出るのが遅いじゃないか!』

ケータイから聞こえてきたのは女の声だった。

『リバーズ』のメンバーと会う為に集まった八月一日。その日付と場所を伝えてきたのもこの女の声だった。

「うるせえ。で…なんだ?」

うんざりしたように右手で持っていたケータイを肩と頬で固定して、空いた右手はズボンのポケットに突っ込んだ。

『ちよつとちよつと、面倒臭がらない!』
その音が聞こえたのか少し焦ったような声で注意をしてくる。

「だからなんだよ……」

女は少し勿体をつけて

『実は理事長からの依頼なんだけど

』

その依頼というのが、『三沢塾の内部に侵入し、とある人物と勝敗を着けずに戦え』というものだったのだ。

『とある人物』が誰かは分からないが、鳴神は依頼をこなすためにここに居る。

ちなみに『現在、三沢塾は科学崇拝を軸においた新興宗教と化している』と電話の女が話していた。

三沢塾は異様な雰囲気を漂わせていた。

まるで世界中でそこにだけ四角く穴が開いたような奇妙な感覚。

鳴神はその奇妙な建物の正面ロビーに足を踏み入れた

中は特に異常もない。

鳴神自身が受験生に見えるのだろう、彼が周りから浮くことはなかった。

鳴神は三沢塾の内部を電磁波で異常がないか確かめる。

(隠し部屋が二十近くあるな)

電磁波で探知したところスペースがあるのに出入口のない部屋が十四、五部屋見つかった。恐らく他にもいくつがあるのだろう。

鳴神はゆっくりと『電気』の速度で移動した』

音の速さでの移動が音速、光の速さでの移動が光速ならば、彼の『雷光共鳴』は雷の速さでの『雷速』移動とでも言うべきか。

(おかしい……)

鳴神が姿を現したのは階段の手前だった。塾生や教師と思われる何人かの人が階段を登り降りしている。

別にそれ自体は不思議でもなんでもない。

異常なのは『鳴神が突然視界に現れたのに誰も眉ひとつ動かさないこと』だ。

そういう状況を見馴れているのなら別だ。

しかし鳴神の能力は学園都市でも唯一、『力』自体になれる能力だろう。

そんな能力を見馴れている筈がない。

それが『非常識』だ。

この場にいる誰もが鳴神についての話をせず、目を合わせようともしない。まるで彼に意識を向ける必要もないという感じた。

「さて…と、隠し部屋を探すか…」

その空気を不自然に感じながらも自分のすべきことを口に出す。

刹那、階段辺りにいた生徒や教師全員が『消えた』

自分からどこかに行った、などではなく鳴神の視界から消えたのだ。まるで、彼の『雷光共鳴』をこの場にいた全員が使ったかのように。

「な…」

余りの出来事に絶句する鳴神。

コッソ コッソ

鳴神以外は誰もいない筈の階段に足音が響く。

鳴神が足音のする方を向くと男がいた。

二メートルに届く細身の身体を包んでいるのは見るだけで高価と分かる純白のスーツ。

髪は緑色。奇妙な色合いに染め上げられオールバックに整えられたその髪だけが、肌も服も白い男を一段と目立たせている。

「何者だ？」

異様な空気の中で先に口を開いたのは鳴神。

恐らくアレイスターの依頼の『とある人物』だろう。

「当然、我が名はアウレオルス・イザード。ただの錬金術師に過ぎん」

『とある人物』 アウレオルス・イザードは自身を『錬金術師』と言った。

この間戦ったのは魔術師だったが、次は錬金術師。鳴神には違いはわからないが恐らく似たようなものだろう。

「で、そんなただの錬金術師が俺に何の用だ？」

鳴神は多少の挑発のニュアンスも混ぜてアウレオルスに聞く。

アウレオルスは表情を変えないまま返事を返す。

「失笑、己がしたことすら分からんとは」

「は？」

意味がわからない。

鳴神はただアレイスターに言われてこのビルに侵入しただけだ。

しかしそんな鳴神を無視してアウレオルスが動いた。

蛇が這い出るような動きで純白のスーツの右袖から出てきたのは黄金の刃物。

（金で作られた鏃…？）

鳴神は眉をひそめる。

確かに鏃の形をしてはいるが、大きさは鏃にしては大きすぎる小ぶりのナイフ程の大きさ。

（投げる為の物か？）

鳴神がそう決めつけかけた瞬間、

「リメン」
「アウレオルスの右手が持ち上がると同時に黄金の鏃の切っ先が鳴神に向く。」

「マグナ！」
直後、鏃が弾丸のように真っ直ぐに鳴神の脳天に向かって飛んできた。

「なっ!?!」
鳴神は飛んできた鏃を身体を捻って避けた。

鏃の尻には黄金の鎖がついていた。
鎖は何もない空中を真っ直ぐ伸び続ける。
鏃が階段の手すりに当たった。

ぱん、と手すりが水風船を割るような音をたて液体となって弾け飛んだ。
液体は金色に輝いている。まるで
いや、まさしく、高熱により溶解した純金だった。

その様子を驚愕の眼差しで見つめる鳴神。
とっさに身を捻って避けることが出来たから良かったものの、当たっていれば自分も純金になっていただろう。

「自然、何を驚いている？」鏃はアウレオルスのスーツの袖に舞い戻っていく。
「我が役は錬金の師。それが何を意味するか、当然分らんとは言わせんよ」

鳴神は絶句する。
彼も魔術師を二人見てきた。超能力者だってこの街にはいる。

だが驚かすにはいられない。
ただのモノを純金に変換する瞬間を見たことなど一度もないのだから。

だがアウレオルス・イザードは実現した。

「我が『瞬間錬金^{リメンマクナ}』は僅かでも傷をつけたモノを即座に純金へと強制変換する。当然、防御など無意味、逃避も不可能。そら、貴様も得物を出せ」

アウレオルスが余裕綽々（よゆうしゃくしゃく）といった感じで鳴神に説明をする。

「
」
鳴神が何かを呟いた。

アウレオルスには聞き取れない程度の声で。

鳴神は心底楽しそうな笑みをアウレオルスに向ける。

「愕然、この場面で笑みをこぼすとは」

アウレオルスは鳴神のその表情を見て、驚きを隠せない。

闘いは嫌いではない。だからこそ笑顔になる。

今度はアウレオルスに聞こえるように辺りに響く声で叫ぶ。

「いいぜ、常識を教えてやるよ、錬金術師　　！！」

#2-2《平穩はなかなか訪れない》（後書き）

やっと緑頭ことアウレオルス・イザードの登場です。

知ってる人は知ってますよね、いま鳴神と戦ってるのはなにか。

それにしても短い　　！

ふざけてんのか僕は！

とかまあ言ってみました。

時間があれば投稿して頂いたオリキャラと鳴神を戦わせるだけのコーナーを作ってみようと思います。

ではまた次回　　。

正直、ヒロインとかまだ決めてない。
だいふく

#2・3へ金もいつかはその輝きを失う(前書き)

更新。

誤字脱字の指摘お願いします。

2 - 3 《金もいつかはその輝きを失う》

「いいぜ、常識を教えてやるよ、錬金術師　　！！」

鳴神は叫んだ。

戦いの狂気の中に身を置くことに喜びを感じているような笑いを顔中に浮かべながら。

鳴神は続ける。

「今度はこっちから行かせてもらう　　！！」
その言葉がアウレオルスの耳に入ると同時に彼の視界から鳴神が消えた。

「　　ッ！」

アウレオルスが黄金の鎖を鳴神が消えた場所に飛ばす　　が、
電気に身体を変換した鳴神には当たらない。

「その鎖、モノしか金に変換しないんだろ？」
声がしたのはアウレオルスの背後。

しまった　　と、彼が思った時には既に身体を電流が駆け抜けていた。

「が　　はっ！」

アウレオルスの息が　　それ以前に心音が止まる。

鳴神の手は、アウレオルスの背中の中左側　　丁度、心臓がある辺りに置かれている。

彼は天気が晴れの場合、6億ボルト、1000アンペアを軽く超え

る電流を発生させる事が出来る。

人間は50アンペア以上の電流を受けると心臓が停止し死に至る。

つまり、鳴神は人間が死ぬ20倍以上もの電流をアウレオルスに流し込んだのだ。

当然、そんなことをされて生きているはずがない。

ドサツ、という音とともにアウレオルスは膝から崩れ落ちた。

「意外に簡単だったな」

鳴神は後頭部を右手で掻き上げながら呟いた。

その時、鳴神の視界の端に何かが映る。

「儼然、つまらんな少年」

突然の声。

声の主は『アウレオルスニイザード』だった。

ただし、鳴神の目の前で倒れているアウレオルスではない。

いつの間にか鳴神の視界に入っていたのだ。もう一人のアウレオルスニイザードが。

「ッ!?」

余りの驚愕に脳が上手く働かない。

なぜ自分の目の前に、殺した筈の相手が立っているのだ? と

という疑問にすら思考が行き届かない。

「自然、殺した人間が目の前に現れれば驚愕しない者は居ないだろう」

アウレオルスは話し出す。

そして、有り得ない事実を告げる。

「当然、それは『偽物』だ」

その台詞を聞いて、やっと鳴神の脳が働き始めた。

「どうということだ？」

クローン技術等を使えば確かに全く同じ人間を作り出すことは出来る。

しかし、アウレオルスは『錬金術師』だ。学園都市の外から来た人間にクローンなど作り出せる筈がない。

「『黄金錬成（アルスニマグナ）』。錬金術師の到達点であり

威圧感。

その言葉の一つ一つに偽物にはなかった威圧感がある。

「己が思考したモノが現実を歪曲させ、支配する」

己が思考したモノ　　頭で考えた事を

現実を歪曲させる　　現実に行き出すことが出来る。

『世界の全て』を支配する魔術、『黄金錬成』。

そんなモノに鳴神程度の能力者が勝てるとは誰も思わない。

逆に言えば 『勝たなくていい』

学園都市統括理事長アレイスターニクローリーからは『勝敗を着けずに戦え』と言われている。

つまり、この戦いに勝利は必要ない。

鳴神は直ぐに行動した。

掌をアウレオルスの方に向け、六億ボルトの蒼白い雷撃を飛ばす。

アウレオルスは微塵も驚かずスーツの懐から髪の毛程に細い鍼を取り出し、首筋に刺した。

しかしアウレオルスは痛そうな表情さえも見せず、抜き取った鍼を投げ捨てた。

「『雷撃は消え去れ』」

アウレオルスの呟きが鳴神の耳に入った瞬間、『六億ボルトの雷撃が消え去った』。

「なっ　！」

『現実を歪められた』

鳴神の飛ばした雷撃が、アウレオルスの言葉によって消し去られた。

それこそが『黄金錬成』の能力^{チカラ}
世界の全てを支配する能力^{チカラ}

「チー！」

鳴神は舌打ちして姿勢を低くして走り始める。

アウレオルスとの距離は五メートルほどしかないためすぐに縮まった。

鳴神は握り締めた拳に電撃を纏わせ、アウレオルスの顔面に向かって勢いよく叩き付ける。

「『その拳は届かない』」

だが、拳は錬金術師には当たらない。何故か当たる直前で止まってしまう。

「クソッ！」

バックステップでアウレオルスから距離をとる鳴神。

もしかするとアウレオルスは鳴神で遊んでいるのかもしれない。恐らく、その気になれば『黄金錬成』を使って鳴神の存在自体を消し去る事が出来るだろう。

「つまらんな、『少年』」

アウレオルスが鳴神との戦いに飽きた。

次に来る台詞からは鳴神を殺す気で来るだろう。

「窒息せよ」

その言葉がアウレオルスの口から発された瞬間に、鳴神の呼吸が苦

しくなった。

「うあ」

息が出来ない。

まるで、己の首に鋼鉄のワイヤーを巻き付けたような苦痛に苦しむ。鳴神はとっさに演算を組み上げ電気に身体を変換し、すぐに元に戻す。

その行動をとったためか、とたんに苦しみから解放された鳴神。

アウレオルスは『鳴神響輝という人間の現実を歪めた』のだ。ならば、その認識をずらしてやればいい。

『鳴神響輝』が窒息するなら『電気』になればいいし、『電気』が消されるなら『鳴神響輝』になればいい。

「な……我が黄金の錬成を打ち破っただど？」

錬金術師は眼を見開く。

「面白い。少年に確定した窒息を現実を歪曲させることで回避するとは」

鳴神は首を右手で押さえてアウレオルスを睨み付け、

「お前が『世界を支配する』ことが、俺が『お前に負ける』ことにはならねえ」

言った。

「ふん。戯れ言だ」

だがアウレオルスは一蹴。

しかし鳴神は笑っている。

アウレオルスニダミーと戦った時もそうだった。

自分が不利になればなる程、いつものクールな鳴神から離れていく。

鳴神のその笑みは心の底から愉しそうだ。

戦いの狂気の中に身を置く彼は戦闘狂になるのかもしれない。

眩く。

鳴神が。

常識を尊重する非常識人が。

「常識ってやつを刻み込んでやるよ、錬金術師」

#2・3《金もいつかはその輝きを失う》（後書き）

ダミーの登場時間みじかいww

まあ気にしたら負けです。

さて、次回がアウレオルスとの戦いの本番ですが、どうしよう全く考えてない。

とにかく、今週中には！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6674y/>

とある科学の雷光共鳴

2011年12月11日23時52分発行